野間 宏

四六判上製・266頁
価1500円・送料160円

現代の王国と奈落

現代文明の危機についての文学者の考

分子生物学の発展の中に「ヨーロッパ近代合理主
の終焉を読み取り，それを批判し乗り越えること
戦後すぐに発表した「全体小説」論の完成へと至る
付討論:沖浦和光(思想家),磯野直秀(生物学者)ほ
朝日新聞など各紙誌の書評欄を賑わす！

0095-917928-7427

轉轍

「虚(うつろ)の城」　定価980円

1979年12月20日　初版1刷発行　<検印廃止>

著者　中島　誠

発行人　芳山邦弘

発行所　株式会社　轉(てん)　轍(てつ)　社

〒113 東京都文京区本郷2-5-6
TEL　東京 03 (814) 1638

発売元　株式会社　文和書房

〒113 東京都文京区小石川3-1-3
TEL　東京 03 (813) 6541(代)

© 1979
(壮光舎印刷・真光社製本)

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

0095－917928－7427

虚(うつろ)の城

サラリーマンの文学

中島 誠

まえがき替りの序説　5

I「視る・触わる・そして読む」文学の時代
——大衆文学の現状を探る

現代大衆小説の条件　18
経営に役立つ文学へ——高成長を競う歴史小説と経済小説　22
奇妙な文学の登場——経済政策型小説　29
PHP小説からの脱出のために——文学の全体化と全体の文学化　35

II サラリーマンの文学——油上に築かれた「虚の城」

1 財・官・学界共同版「堅気ノススメ」——新型言論人の登場……44
甘味なムチ「〝新〟日本人論」——現代生活の倫理・論理・方法の革新を「ひたぶる精神」に訴える　45

危機を売り込む「堅気ノススメ」 49
使命感をかきたてる大人の読み物——新時代の国家イデオロギーを満載 54
A 堺屋 太一 ＝ 政・官・財界の煽動者（アジテーター） 59
B 深田 祐介 ＝ 経済戦争のラッパ手 68
C 渡部 昇一 ＝ 痴的主婦うけの半端修辞屋 86

2 サラリーマンの教科書——修正近代化歴史小説 …… 103
A 山本 周五郎 ＝ 中間管理者へのお手本書き 104
B 司馬 遼太郎 ＝ 歴史をルポするジャーナリスト 121
C 江藤 淳 ＝ 現代管理社会のテクノクラート 136
D 柴田 錬三郎 ＝ 作者自身が曲者となった『曲者時代』 147
E 城山 三郎 ＝ 〝夢よもう一度〟と鼓舞する『黄金の日日』 152
F 松本 清張 ＝ 巨像が虚像となった「空の城」 162

3 青の世代は生き延びられるか …… 167
A 村上 龍・三田誠広・外岡秀俊・中上健次 ＝ 音と色彩と言葉の過剰な反自然的世界に なおも刺激を求めて漂流する彼ら—— 168
B 五木 寛之 ＝ たそがれの青春時代の歌『戒厳令の夜』 175

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

Ⅲ 管理された社会の文学

1 なぜ「家」が問題なのか——文学を家庭論的に考える……192
現代のロビンソン・クルーソー——家郷を出て都市に漂着した核家族 193
マイホーム主義こそ管理社会に抵抗する 198
家を類型化し、会社を特殊化する現代 203
管理社会に対する防禦の「穴」であるが、何ら新しい変革のエネルギーを生まない「箱」 208
A 小松 左京 = あまりにも日本的な科学的事実小説（サイエンス・ノンフィクション）『日本沈没』 213
B 安部 公房 = 〝日本のカフカ〟を意識し過ぎてジレンマに陥った『箱男』と『密会』 227
結論替りのあとがき 249

まえがき替りの序説

1

一九七三年秋の第四次中東戦争とそれに引き続く「石油ショック」による世界資本主義のあり様の変貌を反映して、日本にも明らかにこれまでと異質の小説の分野がひらかれ、これが大衆文学の主流となって流行している。具体的内容と、その変遷についてはI部で詳述したので、ここでは、新たな文学分野に対する性格、つまり名づけ方について考えてみたい。

私は、山岡荘八、山本周五郎らの作品を「PHP小説」、司馬遼太郎に代表される作品を「修正近代化歴史小説」と名づけようと思う。この中に江藤淳の『海は甦える』なども入れたい。司馬遼太郎は、幕末から日露戦争頃までを前へむかって日本近代史観を修正しようとした。江藤淳は、敗戦後の日本から後へ明治国家を遡及して近代を色直ししたと考えられるからである。

そしてここ四、五年の間に城山三郎や堺屋太一らは、産業小説・経済小説を新しく創り出してきたと思う。実は、この名づけ方について私はいろいろ迷った。産業界や企業、さらにはサラリーマンを扱った小説はこれまでにもあった。源氏鶏太はサラリーマン小説の代表と目されるし、黒井千次なども企業の職場の人間の葛藤を好んで描いている。また梶山季之らも産業モノを物している。しかし城

山や堺屋らの書くものは、それらとはちょっと異質なものである。

Ⅰ部の中で、幾つかの名称を並べてみたが、どれも完全にはぴったりしない。経済小説という名を結局は使ってみたが、これにはいくらか説明が必要だと思う。

現代の国家の政治は、経済政策を中心にして成り立っている。農業政策や外交も、教育行政までもが、結局は経済政策の延長線上で行なわれている。こういう経済政策の中で、ここ数年来、中心課題となってきたものが、エネルギー確保と貿易伸長と産業構造の転換、およびそれに伴なう労働力の配置替えの問題である。もっといろいろテーマは数えられるが、一応の中心はこの三つにしぼられると思う。そして、七三、四年以後、新たに登場した小説のうちで、このような国の経済政策の中心課題を、ほとんどそのままテーマにしている作品が急に増えてきたといえる。作家が、経済関係官庁の行政官になりかわったような口吻(こうふん)の小説が、異常に増え、それらがまた非常によく売れる、つまり大量の読者を得ているのだ。

これは一時的な文学界の現象かもしれない。だが単純に看過できない問題を含んでいるように思える。文学の世界に「経済小説」が大きくのさばってきた経緯の中には、かなり長い準備期間があったようだ。私はあえて「のさばってきた」と言ったが、全くそれはそういうよりほかないような感じで、読書の市場を席捲してきたのである。ちょうど敗戦後の日本人の理念が、国力の回復、経済の復興、生産性の向上に収斂されるのと軌を一にして、経済の急成長が、すべての思想や哲学を蹴ちらして進んできたようにである。

この「準備期間」において登場したのは、前述の「PHP小説」と「修正近代化歴史小説」であ

る。これらも私がいわば勝手につけたもので、少し説明が必要であろう。

『PHP』（PHP研究所）とはご存じのように、ナショナル（松下電器）の松下幸之助らを中心につくられてきた小雑誌である。小さな月刊誌だが、部数は非常に多い。戦後、コメの生産増強が国の農業政策の中心課題であった頃には、『家の光』（家の光協会）が隠れたベストセラー誌だといわれた。しかし、やがて日本の農村の過剰人口が都市の産業労働に吸収され、主要な働き手までが工場に狩り出されるようになって、必然的に農業が省力化のための技術改革を追求せねばならない時代になると、『家の光』は『PHP』にとって代わられた。

「PHP」はPeace（平和）and Happiness（幸福）though Prosperity（繁昌）の略であり、その理念は結局、人間、真面目に働けば必ず道はひらける、ただしいろいろ工夫して頭を使わねば他人より豊かな生活は保障されない、というほどの意味である。『PHP』に満載されたエッセイ群は、そのどれ一つとってみても、それ自体文句のつけようのない身の上話であり、人生苦労の回顧談であり、また教訓、美談である。ひと口にいえば、現代の儒教である。文明開化的な儒教のパノラマであるともいえる。雑誌『PHP』は真面目でしかもうだつの上がらぬ青年と、そういう人間を労働力として雇う中小企業主によく読まれている。ナショナルや三洋電機などでは労働組合までがこれをテキストに使っている。高成長のひずみの中で懸命に働き働かされる人間の鎮静剤に『PHP』はなったのである。そして実際に、敗戦前後に生まれて農村から都市へ流出した青年たちは、経済成長のパイの分配のおこぼれにあずかり、戦後二十数年たって中流の生活意識を得られたのである。

そのPHP研究所から七八年一月に創刊された月刊誌『Voice（ボイス）』は『PHP』の理論政策版で

ある。『ＰＨＰ』に載るような人生譚をひきのばして長篇小説に仕立てたのが山岡荘八であり、山本周五郎あるいは曾野綾子や新田次郎である。そして『Ｖｏｉｃｅ』に載るようなものを小説化したのが城山三郎や堺屋太一であるといえる。山岡はついに『人間笹川良一』を七八年四月に完成した!!

司馬遼太郎や江藤淳は、『ＰＨＰ』と『Ｖｏｉｃｅ』に載るようなものを歴史的に裏づける作品を書いて、日本近代の歩みを、一方は前へ前へと、他方は後へ後へと辿ってみせたものである。司馬の『竜馬がゆく』と『坂の上の雲』（両書とも文藝春秋社）は前者の代表作であり、江藤の『一族再会』（講談社）と『海は甦える』（文藝春秋社）は後者の代表作である。傍点を打ったように、その書名にもその歴史意識の方向性が示されているではないか。

2

こうして『ＰＨＰ』小説から「修正近代化歴史小説」へ、さらに『Ｖｏｉｃｅ』小説つまり経済小説へと大衆文学の新たな〝荒野〟は拓けてきた。それはなぜ荒野か。これらの小説群は、人々を励まし促してどんな劣悪な条件でもとにかく働くことが美徳だ、あるいは頭を使うことが豊かになる道だと教えてきたのである。したがって経済小説とは企業小説ではなくむしろ国(家政)策(ＰＲ)小説なのである。そしてそれは産業政策小説ともいえる。

なぜ国策小説であり産業政策小説なのか。これらの作品を書く作家たちは、生産のメカニズムそのものを決して描こうとはしないのである。その点では、後述するように松本清張も例外ではない。彼らは、産業政策が企業の経営に及ぼすさまざまな〝結果〟を描くだけであって、生産の現場というも

のを知らず、したがって決してこれを書こうとはしない。そして生産する者の生活を生産との関係で描くことができないのである。

『PHP』小説は、人々に生産することよりも製造することへの没頭を教えた。現代の労働者の大部分は、ものを生産しているのではなく製造しているのである。この点は、現代の農民も同様である。

生産の構造と生産する者を描かない以上、産業小説は産業政策小説にならざるをえず、産業政策小説は経済小説、つまり経済政策・国策小説になるよりほかないのである。もちろん、文学は生産の現場や生産する人間を描かなければならないということはない。大部分の小説はこれをよけて通っている。しかし、同時に、産業の構造や企業の経営のからくり、ないしは産業活動と国の経済政策との関係などについても、ほとんどの小説は、わざわざこれに触れようとはしない。経済小説、国策小説が初めてこの世界に踏み込んだのである。そこへメスを入れることに私は反対しない。むしろ結構なことである。しかし、経済小説は生産現場と生産する人間群像に一切目をやらず、生産の土台の上にうごめく経営のからくりおよび、それと国策との関連のみを描く。つまり、産業活動における管理構造のみを題材にする。したがって出てくる人物は、社長や会長、重役やせいぜい中間管理職から秘書どまりであり、舞台も工場ではなく本社ビルの範囲にとどまる。たまたま工場が出てきても、ほとんど労働する者の不在な空間でしかない。いわんや、労働する者の内側から物事をみたり感じたり行動することは皆無である。

このような設定の限界のために、経済小説は国策小説になるとともに、暴露小説か推理小説になり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

やすい。人間の醜悪な面、どす黒いかけ引き、暗い犯罪的な競争葛藤が筋の興味の中心となる。さもなければ、将来に不安をかもし出す危機の解説的小説か、その危機を回避するためのナショナルな教訓啓蒙小説となってしまう。

3

ところが、この経済小説は非常によく売れるのである。売れて読まれる大衆性に私は反対するのではない。大量に売れるからこそ注目するのである。よく売れる小説に対して、あれは〝下らぬ〟から読まれるのだという考えに私は反対する。〝下らぬ〟小説を需要する人々の本心は、最も経済的生活に不安を持つ人々である。

彼ら読者は、いや私自身も含めて、自分と最も遠い距離にある資本の世界に関心を持ち、そこでの暗い危機感の中に、自分の生活不安と直通するものを感じとるのである。そして生産する労働者自身が生産と生活の深いかかわりをリアルに描く作品に対し、むしろ嫌悪の感情を抱いてしまう。この嫌悪感は自分の生活に対するうんざりした毎日の気持ちの無意識な反映であり、やりきれない自らの暮らしを、同じような条件にある者が同じように描くことに共感を持てないのである。

いわゆるエロ物、時代小説、SF、推理物、そして近頃の経済小説の読者の大部分が、国内で最も真面目に毎日を一生懸命働いている人々である事実を直視できずに、今日の多くの批評や文学論がまかりとおっていることはおどろくべき矛盾である。

自分のことを掌を指すように書かれるのは辛いことである。自分の問題となると、未解決のこと、

矛盾だらけでよくわからぬことが山積しているものである。わずらわしい身辺雑事をこまごまと描いてしかも読者を楽しませるには、志賀直哉や永井龍男ほどの腕が必要なので、そこまで行かぬ大部分の作家が、ほんとうの人間の生産と生活の関係を描くと、わけのわからぬいらいらした感情を読者に抱かせてしまう。嫌悪と恐怖と絶望感を抱かせる文学こそ真の文学だとする人もあるが、いわゆる大衆はそっぽを向いてしまう。そこで、自分自身、毎日金をかせいで生きていかねばならない八～九割の作家は、筋の単純な、結末のはじめから大体予測のつく、つまり読んでも疲れない小説を書いて提供するのである。どんなに登場人物が多くても、壮大なスケールを持っていても、時代小説や推理小説は読者を必要以上に疲労させることはない。

必要以上にとは、明日の仕事にさしつかえない程度、電車の中で読んでも仕事机まで疑問や不安を持ちこさない程度以上にということである。人々は必要な程度には、何かを読んだ疲労感を欲している。何も読まない空虚感よりは多少の疲労感を持つほうが精神が休まる。神経のマッサージになるのである。

適度な精神の疲労感をもたらし、適度に知的満足感を与え、そのうえ、何かいまの生活と仕事の仕方、人とのつきあい方にプラスになるような教訓を与えられるような小説があれば、何万何十万の人達にとって最上の贈り物となる。すなわち、真面目に休みなく働こうとする人々であればあるほど、二宮尊徳や福沢諭吉や武者小路実篤などの人生訓を額に入れて掲げ、また『ＰＨＰ』や国策的経済小説を読むことになるのだ。そしてそのような人々は、人生訓を暗唱し、小説を読むことでますます、オチオチ怠けてはいられないぞ、もっともっと仕事をしなければ将来が不安だぞという気になる。

人々を立ちどまらせ、じっと考えこませて仕事が手につかなくさせるような小説、別の方向へ走り出させるような小説、世の中の上空にひょいと飛翔して笑い出したくさせるような小説は、経済小説の対極にあるもので、これは悪魔の小説とみなされる。

しかし、経済小説はただ大衆に迎合して単純な筋立てを追っているのではない。作者は大変な努力をし、作品の中に人々の知ることのできないデータを、集めることのおよそ困難な情報をいっぱいつめこんで、これでもかこれでもかというふうにみせている。人々はまずこの豊富なデータに幻惑され、作者の情報収集力を尊敬し、作家というより一種の何か強大な専門家と思ってしまう。『死霊』の作者よりも『日本の黒い霧』や『古代史疑』の作者のほうを人々ははるかに畏敬するだろう。「二流の人」や「道鏡」の作者・坂口安吾よりも、『翔ぶが如く』の作者のほうを、人々は博識の人と思いこむのである。

4

渡部昇一も『知的生活の方法』(講談社)の中で言っているように(私はこれを、小説のように読まれているということで、またこれまでの私小説の流れを汲むものと考えるので小説の中に数えている)、今日の流行作家は一作ごとにトラック一杯分の資料を集める資力と、それを整理分析させる労力を使用できる仕組みを持っていなければならない。データと情報を独占できる者が現代の国家を管理支配できるように、今日の流行作家、特に歴史小説と経済小説の作者たちは、情報を小説の版元から提供され、データ収集を編集担当者に任せることで量産もできるようになった。作家がこれだけの力を持つようにな

ったのは、やはり高度経済成長の結果であろう。一人の流行作家の一つの作品に大量の資金を注ぎこんで材料を集め、宣伝ができるようになったわけで、以前には考えることのできないような小説「製造」の方法である。小説も金をかけて製造するからには絶対に大量生産しなければならず、もちろん大量販売されなければならない。

経済小説の作者が情報の独占機関である官庁の中から誕生しつつあるのは当然のことであろう。そしてその情報たるや国策によりそった経済政策、産業政策が中心になるのも無理からぬことである。やや皮肉な言い方を許してもらうと、現在、一人の流行作家になろうと思ったら、情報の独占機関に近づいて、そこからテーマとデータを提供してもらえるような小説を工夫するのが早道かもしれない。どうみても特定の産業か企業の広告宣伝がわりとしか思えないようなエッセイや小説が存在し、特定の官庁や公安筋からデータを提供され、果ては取材費ぐるみのために〝創作の自由〟を拘束されているのではないかとかんぐりたくなる作品が、最近では多いのである。

実際、私などが個人で大企業や大官庁の巨大なビルのドアを押して入っても、ガードマンにさえぎられるのがせいぜいである。個人としての作家が、尨大な情報を手に入れてそれを小説化する機会を得るには、何か大衆にとっては、はかり知れぬ関門を突破せねばならない。それは個人としての作家の努力以上のものである。その不可侵の領域を大衆は畏敬して作品を読むのである。

現代の経済小説の作者たちは、生産する人々の現場へ踏みこんでいくかわりに、上へ上へと情報の集中する産業国家の中心へ近づき、収集したデータを小説というマスメディアを通して人々に提供している。経済小説の作者の中に、官庁中枢にいる人間とともに、ジャーナリスト出身の人が多いのも

また当然なのである。何万という読者は、この場合でも、上から降りてくる情報がなまのままであることを要求しない。労働の現場のリアルな描写に食傷しているように、情報の束も壮大な虚構に料理されていることを欲する。

すなわちいまや、国家の政策は新聞やテレビで伝えられるよりも、小説化されて人々に伝達されるほうが、より国策宣伝の方法にかなうのである。そこで例えば江藤淳のように、一人で文芸批評家とNHKの解説者と小説製造家との三役をこなす人も生まれてくる。文学の世界から彼のようなオピニオンリーダーが生まれる可能性は、かつては皆無に等しかったはずである。

5

文芸批評家としての江藤淳は、戦後文学は日本の戦後の遺産を食いつぶしてだめになったという。同時に新しい世代の文学は、その文章が何といじましいことか、小説にするほどのものでない材料で何と長々と書くことかと批判する。彼の批評は、中高年齢層向けのものになっている。いわゆる窓際族、出向族、停年間際の人々に受け入れられる。彼らの世代は、江藤の戦後文学衰弱論に、わが身をゆすぶられるような一種のカタストロフィー（自虐的悲劇的結末）をみる。さらに興味深いことは、江藤の文学批評を読んで心の浄化を覚え、体内に爽快さを感じる世代は、同時に城山三郎の愛読者である事実である。江藤淳の批評はいつも安心して読めるという人が多い。彼の批評上の戦略は、教育や文化についての放送用の解説のスタイルに連動している。彼の文明万般についての解説は、イギリスの古典的なミドルクラスの生活様式を支える教養を糧にし模範としている。

このような解説は経済小説の読者に抵抗なく受容される。つまり、江藤淳の批評の方法は非常に大衆的なのである。

このことは、近頃刊行された小林秀雄の『本居宣長』（新潮社）が予想外の売れ行きを示していることとどこかでつながる。人々は宣長を全集では決して読まず、小林秀雄の「宣長」をみるのである。人々はそこに近世日本に培われた学問の〝影〟をみる。学問をする者は生活が意外に合理的であり、同時に内に密められた心は神秘的、呪術的であるさまをみる。つまり学者とは孤独で孤高な人間であることを悟る。

小林秀雄が『本居宣長』で最も言いたかったことは、学者の孤独ということであり、この孤独とは近代人のそれとは異なり、歴史の伝統を生活様式のうえでも受けついで行く意識の尊さであるということである。江藤淳の『一族再会』は、小林秀雄における宣長のテーマと非常によく照合している。江藤淳は『一族再会』『海は甦える』を書き、さらに『海舟余波』などによって、勝海舟に自らの近代人としての構想を投入することで、文学批評の現実性を断念したのかもしれない。彼のこのような断念の結果生まれた批評の文体は、こんな文章を作家が書いてよいものだろうか、こんなものが小説といえるだろうか、という類いの単純明快な小言（こごと）の体となったのである。これは江藤自身の『作家は行動する』（講談社）や『奴隷の思想を排す』（文藝春秋社）からのはるかな後退であるように思えてならない。彼が近頃つむぎ出している批評の小言体的文章は、裏返すと教育文化万般の解説となる。

吉本隆明は『本居宣長』について、「……いわば小林の無意識の織りなす綾のうちに、営々たる、戦後の解放と営みを全否定しようとするモチーフが、あやしい光を曳いてゆくのをどうすることもで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com